

出身大学の相違が幸福度に与える影響

太田 翔^a 高橋義明^b

要約

近年、少子化が進み、実質的な大学全入時代となっている日本では、大学の経営難が問題視されている。大学経営の観点から魅力的な大学にするためには、どのような大学資源に投資、あるいは戦略を実行すべきなのだろうか。20～39歳の男女を対象に行われたインターネットアンケート調査を用い、収集された人々の幸福度と様々な大学の質の指標との関係性を、所得をコントロールした上で順序プロビット分析によって検証した(n=4587)。その結果、出身大学の大学入試難易度(偏差値)は人々の幸福度に影響を与えなかった。一方で、国公立大学出身の方が私立大学出身者より幸福度が高いことがわかった。しかし、本稿では具体的に大学のどのような資源に投資、あるいは戦略を実行すべきかについては踏み込むことができなかった。今後は、大学図書館や科研費などの指標と人々の幸福度の関係性を検証することで、大学のあり方に対して提言することを目指したい。

JEL 分類番号: I26, I31, C21

キーワード: 幸福度, 教育, 大学, 偏差値

^a 筑波大学大学院 s1520463@sk.tsukuba.ac.jp

^b 公益財団法人世界平和研究所

1. イントロダクション

近年、大学に進学する人々が増加している。平成 26 年度学校基本調査によると、平成 26 年 5 月 1 日現在で、過年度卒を含む大学・短大進学率は 56.7%であり、高校を卒業した半数以上の学生が大学に進学している(文部科学省 2015)。しかし、日本には多くの大学があり、人気のある大学もあればそうでない大学もあるだろう。少子化が進み、実質的な大学全入時代となっている日本では、大学の経営難が問題視されている。したがって、大学経営の観点からは、まずは多くの学生を集め、経営資金を集めることが 1 つの重要な目標であるだろう。そして、その大学の卒業生が「この大学に入ってよかった」と思い、その大学の魅力や大学での経験を後輩に伝えていくことによって、その大学の評判は高まり、さらなる学生の確保につながっていくと考えられる。

では、そのような魅力的な大学にするためには、大学のどのような資源に投資し、あるいはどのような政策を実行すべきなのだろうか。本研究では、人々の「主観的幸福度」という指標を用い、様々な大学の質の指標との関係性を見ることで、これらの問題の解決を目指していく。

本研究で、「主観的幸福度」という指標を用いる理由は、幸福になることが人々の究極的な目標であるからである。大学教育の効果を所得で推計した先行研究として、例えば Nakamuro and Inui (2013)があるが、結論としては「学生比率」や「教授比率」等、ほとんどの大学の質は、所得に影響を与えないとしている。しかし、人々はより良い所得を得るためだけに大学に進学するわけではないだろう。そこで、本研究では、「主観的幸福度」という指標を用いる。人々の幸福度には、所得に限らず様々な要因が影響を与えていることが知られている。つまり、大学教育の成果は所得を含め、様々な要因に影響を与え、それらの要因が最終的に人々の幸福度に影響を与えていると考えられる。本研究では、クロスセクションのデータを用いるため、大学教育の成果が実際にどのような経路で最終的に人々の幸福度に影響を与えているかは解明することは困難であるが、大学教育の成果として非金銭的な要因をカバーできる点で、本研究には意義があると考えられる。

2. 先行研究

2.1. 幸福度における教育の意味の整理

教育を含む様々な要因と幸福度の関係を検証した研究として、Frey and Stutzer (2000)がある。Frey and Stutzer (2000)は、ドイツやスイスで集められたデータを用いて順序プロビット分析を行ったところ、高学歴な人は、低学歴な人より幸福であることを明らかにした。また、日本人に対して行った大竹(2004)や筒井ら(2009)でも、ともに大卒が他の学

歴と比べて幸福であることを示している。しかし、いずれの研究も指標として最終学歴を使用しており、教育の質がより深く考慮されているとは言えないだろう。

また、一般的に教育は人的資本の蓄積と考えられているが、教育が社会関係資本を蓄積し、幸福度に影響を与えるというルートも考えられる。DiI1(1995)は、外部の高等教育機関と連携し、教育指導の評価、議論などを行う質保証システムの事例から、高等教育が人的資本だけでなく社会関係資本を育成することを述べている。また、文部科学省(2010)は、独自にインタビュー調査やアンケート調査を行い、分析から、個人レベルの教育経験や、地域内における学校支援活動の実施などを含む教育に関するいくつかの項目が社会関係資本に影響を与える傾向があることをまとめている。一方、Putnam(2000)は、定期的な教会参加やボランティア参加などの社会的なつながりが幸福感に深く関連していることを明らかにしている。このようなことから、教育は社会関係資本を蓄積させることで、人々の幸福を高めていくという意味があると考えられる。

2.2. 教育の質の分類・測定

教育の質に注目した研究として、例えば Long(2008)は、大学の質を“institutional quality”“peer quality”“faculty quality”と分類している。それを受けて Nakamuro and Inui(2013)は、“institutional quality”として「大学のタイプ(国公立か私立か)」「大学の位置(大都市圏か否か)」、「peer quality”として「全学生数」「Ph.D 学生/全学生比率」「外国人/日本人学生比率」、「faculty quality”として「学生/常勤職員比率」「学生/運営職員比率」「常勤教授/全常勤職員比率」「常勤/非常勤職員比率」「外国人/日本人職員比率」を採用し、また、国公立大学においてのみ、「常勤職員の平均収入」「学生あたりの授業料」「国や地方からの学生あたり助成金」、さらに、大学の選抜性を表す指標として「偏差値」も使用し、所得との関係を分析した。

Nakamuro and Inui(2013)は、さまざまなモデルで回帰分析を行っているが、特に大学以前の教育状況を考慮したモデルにおいては、有意な影響を与えた大学の質は「大学のタイプ(国公立か私立か)」のみであった。したがって、本研究ではまず、Long(2008)の分類における“institutional quality”として「大学のタイプ(国公立か私立か)」を採用する。また、日本における大学の選抜性や相対的競争力を表すものとして「偏差値」を採用する。

3. 仮説

ここからは本研究における仮説について説明する。溝上(2009)は、大学生の生活に関する調査データを用いた分析から人間関係を重視する学生はそうでない学生と比べて知識や

技能を獲得し、偏差値も高い傾向があることを示した。また、宋戸・佐々木(2011)やDiener and Seligman(2002)は、友人との親密な関係が、幸福感にプラスの影響を与えることを示した。つまり、偏差値が高い人は人間関係を重視し、友人と関わる頻度が増え、幸福度が高くなるとも考えられることから

H1:「出身大学の偏差値が高い人は、幸福度が高い」

を仮説1として設定する。

また、Nakamuro and Inui (2013)は、「大学のタイプ（国公立か私立か 私立=1）」が所得に対して負の影響を与えていることを示した。また、筒井ら(2009)やBlanchflower and Oswald(2002)によって、所得が増えるにつれ、幸福度が高くなる傾向があることが報告されている。つまり、国公立大学出身の人は所得が高くなり、そして、所得が高いほど、幸福度が高くなることから

H2:「国公立大学出身の人は私立大学出身の人より幸福度が高い」

を仮説2として設定する。

4. 分析方法

本研究では、20歳から39歳の男女を対象とした「あなたご自身に関するアンケート」という題目で、2010年12月末にインターネットを通じて集められた調査データを使用する。このアンケートでは、20000人に対して、幸福度や生活満足度、日常の考えや行動についての質問等に加え、性別、年齢、職業、最終学歴についての回答を得た。特に、最終学歴で「大学」「大学院修士課程」「大学院博士課程」を選んだ場合においては、卒業した大学名と学部名(大学院に進まれた方も大学院ではなく学部卒業時の大学の大学名と学部名)、その大学を卒業した卒業年についても回答する形となっている。

まず、仮説1を検証するために、この最終学歴のデータと代々木ゼミナール発表の「大学入試難易ランキング」に掲載されている大学学部別の偏差値を使用した。それぞれ出身大学別のデータに当てはめるために、大学を入学してから留年をせずに卒業したという仮定をおき、6年制である医学部、獣医学部(獣医畜産学部、農獣医学部)に関しては6年前、それ以外の学部に関しては4年前の偏差値を参照した。また、「大学入試難易ランキング」では、大学によっては学科ごとの偏差値が掲載されており、学部の中に複数の学科がある場合は、3つの変数を作成した。具体的には、その最大値、最小値、平均値を算出した(以降、最大偏差値、最小偏差値、平均偏差値とする)。仮説2については、アンケートによる最終学歴のデータと朝日新聞社発表の「大学ランキング」に掲載されている私立・国公立の分類を使用し、こちらもそれぞれ出身大学別のデータに当てはめる。こちらについても、上記のアンケートにおいて1998年以降(～2011年)に卒業したと回答したデータを分析

対象とした。以上を踏まえ、入手可能であった「大学入試難易ランキング」は1994年版以降であったため、上記のアンケートにおいて1998年以降（～2011年）に卒業したと回答したデータを分析対象とした。所得の欠損値等を除いて、最終的に使用したサンプル数は4587であった。

5. 結果

まず、サンプル数が15以上観測された大学(97校)のうち、出身大学別の平均幸福度上位10校を平均偏差値の平均値とともに示したのが表1である。この表より平均幸福度が高いからといって、その人の出身大学の平均偏差値も高いというわけではないということがわかる。

表1 平均幸福度上位10校

大学名	幸福度		平均偏差値		サンプル数
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
北里大学	7.563	1.965	56.531	3.068	16
甲南大学	7.150	1.565	55.975	2.849	20
九州大学	7.123	1.823	60.967	2.535	57
立教大学	7.077	2.497	62.327	1.476	26
香川大学	6.933	1.870	58.433	3.099	15
東京国際大学	6.933	2.219	49.417	4.257	15
山形大学	6.875	2.112	53.927	4.974	24
横浜国立大学	6.857	2.013	59.277	2.115	28
愛媛大学	6.792	2.322	55.767	3.865	24
追手門学院大学	6.789	2.394	51.553	2.783	19
中央値校(97校中)	6.273	2.074	55.902	1.837	22
最大値校(97校中)	7.563	1.965	56.531	3.068	16
最小値校(97校中)	5.281	2.372	51.797	2.462	32

続いて、年齢や性別、家庭環境などを一定にした場合の大学の質変数と幸福度の関係を見るために順序ロジット分析を行った。被説明変数として0から10の段階を示す幸福度、説明変数として、偏差値(モデル1では最大偏差値、モデル2では最小偏差値、モデル3では最大偏差値)、国公立ダミー、平均偏差値と国公立ダミーの交差項、所得、性別、年齢、幼稚園ダミー、15歳時の暮らし向きダミー、父親の学歴ダミー、母親の学歴ダミーを加えた。本研究ではクロスセクションデータを用いているため、個人属性を完全にコントロー

ルすることができないが、本分析では特に大学進学前の家庭環境を表す変数として、幼稚園ダミー、15歳時の暮らし向きダミー、父親の学歴ダミー、母親の学歴ダミーを説明変数として加えることで個人属性をコントロールしている。

表2 回帰結果

	モデル1			モデル2			モデル3		
	係数	標準偏差		係数	標準偏差		係数	標準偏差	
最大偏差値	0.0034	0.0048							
最小偏差値				0.0040	0.0046				
平均偏差値							0.0038	0.0048	
国公立D	0.1197	0.0029	***	0.3376	0.0025	***	0.2241	0.0025	***
平均偏差値×国公立D	0.0008	0.0010		-0.0028	0.0010	**	-0.0009	0.0010	
所得	0.0003	0.0001	***	0.0003	0.0001	***	0.0003	0.0001	***
サンプル数	4587			4587			4587		
PseudoR2	0.014			0.014			0.014		
AIC	19750.34			19750.39			19750.37		

*** p < 0.001, ** p < 0.01, * p < 0.05

(注)説明変数には上記以外に性別、年齢、幼稚園ダミー、15歳時の暮らし向きダミー、父親の学歴ダミー、母親の学歴ダミーを加えた

モデル1、モデル2、モデル3より、最大、最小、平均偏差値の係数はいずれも正だが有意ではない。一方、国公立ダミーは係数が正で有意である。したがって、国公立大学出身の方が私立大学出身者と比べて幸福度が高いことがわかった。

6. まとめ

偏差値は、大学側のみの努力で変化させられるものではないが、学生にとっては、進学する大学を選択する際に重要なデータである。また、偏差値はその大学に在籍する学生の質を表す1つの変数でもあるだろう。回帰分析により、出身大学の偏差値は幸福度に対して有意な影響を与えていないことが明らかになったという結果は、偏差値の高い大学にとって「偏差値の高い」優秀な学生が集まっているということアピールすることが、大学経営の観点で優位な要素というわけではないということを示唆する。一方、出身大学が国公立であることが幸福度に対して有意な影響を与えていることが明らかになった。したがって、国公立大学出身であることが、就職の際有利となり、所得を高め、高い幸福度につながっている可能性がある。

しかし、現時点では大学のどのような資源に投資し、あるいはどのような戦略を実行すべきかについては踏み込むことができなかった。よって、今後はLong(2008)の分類における“peer quality”として「大学図書館の書籍貸出率(貸出冊数/学生数)」、「faculty

quality”として「科研費配分総額」を採用し、幸福度との関係を明らかにすることで、大学のあり方に対して提言することなどを目指したい。

引用文献

- 大竹文雄, 2004. 失業と幸福度. 日本労働研究雑誌 2004 年 7 月号 no. 528, 59-68
- 宋戸邦章, 佐々木尚之, 2011. 日本人の幸福感. 社会学評論 Vol. 62 No. 3, 336-355
- 筒井義郎, 大竹文雄, 池田新介, 2009. なぜあなたは不幸なのか. 大阪大学経済学第 58 巻第 4 号, 20-57
- 溝上慎一, 2009. 「大学生の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討: 正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す. 京都大学高等教育研究 Vol. 15, 107-118
- 文部科学省, 2010. 平成 22 年度 教育投資が社会関係資本に与える影響に関する調査研究.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/chousa/1351465.htm
- 文部科学省, 2015. 平成 26 年度学校基本調査(確定値)について.
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1354124.htm
- Blanchflower, D. G. and Oswald, A. J., 2002. Well-being over Time in Britain and the USA, *Journal of Public Economics*, 88, 1359-1386
- Diener, E. and Seligman, M. E. P., 2002 Very happy people, *Psychological Science*, 13(1), 81-84
- Dill, D. D., 1995. Through Deming's eyes: A cross-national analysis of quality assurance policies in higher education. *Quality in Higher Education* 1, 95-110
- Frey, B. S., & Stutzer, A., 2000. Maximising happiness?. *German Economic Review*, 1(2), 145-167.
- Long, M. C., 2008. College quality and early adult outcomes. *Economics of Education Review*, 27(5), 588-602
- Nakamuro, M., & Inui, T., 2013. The Returns to College Quality in Japan: Does Your College Choice Affect Your Earnings?. ESRI Discussion Paper Series.
- Putnam, R. D., 2000. *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York: Simon and Schuster. パットナム, R. D. 柴内康文訳, 孤独なボウリング-米国コミュニティの崩壊と再生 2006. 柏書房